紙筒を支える金具が備えられているので、艾と皮膚との距離を一定に保つことができ、その紙筒を上下に移動すれば温度調節も容易に行える。また、部品Bの中ほどには格子状の金具があり、艾の灰はそこに落ちるので肌の上に落ちる心配がないなど、渡邉氏のこだわりが随所に見られる（**図3、図4**）。さらにこの温灸器は完成してから20年間、一度も壊れたことがないという。

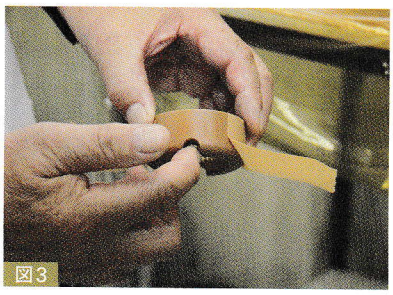
図3

図4

部品Bには、温灸器内の温度が一定になるように空気孔を設け（図3）、中ほどに格子状の金具をつけて灰が肌の上にこぼれないようにしている（図4）。これらも渡邉氏がこだわった点である

図5

図6

図7

温灸器は鍋型のものもあり、図5の器具に艾が入った皿を乗せ、図6のように配置する。筋の緊張の範囲が広いときは鍋型温灸器のほうが効果的とのこと。鍋型温灸器には切り艾（図7）を使用している

02 開放感のある治療室が生む共感と共有

治療室はベッドの間に仕切りなどを設けない開放的な空間となっており、最大で8人同時に治療を行うことができる（**図8、図9**）。これについて渡邉氏は「患者は『つらいのは自分だけではない』と思うことで、安心感を得られる。そういった症状に対するつらさの共感や治したい気持ちの共有ができる場を提供することが一つの目的」と述べた。

患者は他人に治療を受けている様子を見られることに抵抗はないのだろうか。

「他人に見られることを嫌がる患者はいませんね。それは、当院に来院する患者のほとんどが『痛くてたまらない症状を何とかするために治療を受ける』という気持ちでいるからだと思います」

また、仕切りを設けないことでスタッフの目が行き届きやすくなるという、安全面でのメリットもあると渡邉氏は話す。

図8

治療室の様子。8台のベッドには排煙装置が備えられている

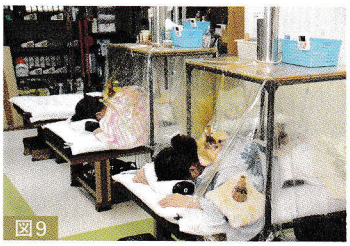
図9

ベッドの間に仕切りを設けておらず、開放的な空間になっている

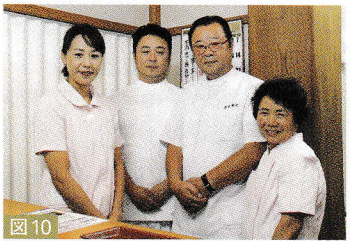
図10

スタッフの皆さん。左から山本陽子氏、副院長の渡邉哲也氏、渡邉元氏、渡邉清美氏